河内長野市文化財調査報告書第48輯

河内長野市埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅦ

烏帽子形城跡
観心寺遺跡

２００８年３月

河内長野市教育委員会

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう街道の要衝として発展してきた街です。このため、市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした文化財や自然に対する影響は大きなものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は、開発と直接的に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、現在の、更には未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市に於いては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は、発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達の残したメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めて頂くと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用して頂ければ幸いです。

これらの発掘調査に協力して頂ました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に、末尾ながら謝意を表すものです。

平成20年３月

河内長野市教育委員会
教育長　福　田　弘　行

例　　言

1．本報告書は、平成18年度・平成19年度文部科学省の国庫補助事業として、河内長野市教育委員会が実施した烏帽子形城跡（ＥＢＳ06－１)、観心寺遺跡（ＫＳＴ07－１)、の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、河内長野市教育委員会教育部社会教育課太田宏明を担当者として実施した。

3．本書の編集・執筆は太田が行なった。

4．発掘調査及び内業整理については、下記の方々の参加・協力を得た。(敬称略)
池田和江・大西美智子・周藤光代・平松由紀・牟田口京子・山﨑和子・河内長野市文化財ボランティア

5．写真撮影は、太田が行った。

6．発掘調査については下記の方々の協力を得た。(敬称略)
和泉大樹・千田嘉博・竹鼻康次・中井均・西山昌孝・福田英人・藤岡英礼・藤田徹也・堀内和明・三好玄・椋本進・宗教法人　観心寺、増田設計室、河内長野市文化財ボランティア

7．本調査の記録として、写真・実測図及び、カラースライド等を作成した。また出土遺物については、市教育委員会で保管している。広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡　　例

1．本報告書に記載されている標高は、ＴＰを基準としている。

2．土色については、「新版標準土色帖」2003年度版による。

3．平面測量基準は、国家座標第Ⅵ系による５ｍメッシュを基準に実施したものである。

4．図中の北は、磁北である。

5．本書の遺構名は、下記の略記号を用いた。

ＳＢ…掘立柱建物	ＳＣ…炉	ＳＤ…溝・暗渠	ＳＥ…井戸
ＳＦ…道路	ＳＫ…土坑	ＳＬ…甕埋納遺構	ＳＮ…桶埋納遺構
ＳＯ…土釜埋納遺構（土公供遺構）		ＳＰ…遺物出土ピット	ＳＴ…墓
ＳＵ…集石・石敷遺構		ＳＷ…石垣・石組・石列	
ＳＸ…落ち込み・不明		ＮＲ…自然流路	ＮＶ…谷状地形

6．遺構実測図の縮尺は1/30・1/60である。

7．遺物実測図の縮尺は、土器1/4・漆器1/4・石器2/3・金属製品1/3・銅銭原寸を基準としているが、遺物の状況により変更している場合がある。

8．遺物名は、土師質土器を土師質、瓦質土器を瓦質、須恵質土器を須恵質と略称し、器種名を付した。

9．遺物の断面は、土師器・土師質土器・漆器・石製品が白抜き、須恵器・瓦器・瓦質土器・須恵質土器・陶磁器が黒塗り、瓦・木製品・金属製品が斜線である。

10．遺物番号と写真図版の番号は一致する。

目　　次

序文
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次
第１章　調査の状況 …… 1
第２章　調査の結果 …… 7
　第１節　烏帽子形城跡（ＥＢＳ06－１）…… 7
　　１　位置と環境 …… 7
　　２　遺跡の概要 …… 8
　　３　調査へ至る経緯と目的…… 9
　　４　第１調査区 ……11
　　５　第２調査区 ……11
　　６　まとめ ……15
　第２節　観心寺遺跡（ＫＳＴ07－１）……17
　　１　遺跡の概略 ……17
　　２　調査に至る経緯と経過……18
　　３　調査結果 ……18
　　４　まとめ ……25

挿　図　目　次

第１図　河内長野市遺跡分布図（1/40,000）……4
第２図　ＥＢＳ０６－１調査区位置図（1/1,000）……7
第３図　ＥＢＳ０６－１第１調査区平面図（1/60）……10
第４図　ＥＢＳ０６－１第２調査区平面図（1/100）……11
第５図　ＥＢＳ０６－１土層断面図（1/60）……12
第６図　烏帽子形城跡測量図（1/1,000）……13・14
第７図　ＥＢＳ０６－１出土遺物実測図（1/4）……15
第８図　ＫＳＴ０７－１調査区位置図（1/2,500）……17
第９図　ＫＳＴ０７－１調査区平面図（1/60）……19
第10図　ＫＳＴ０７－１石組遺構（SW １～３）実測図（1/30）……21
第11図　ＫＳＴ０７－１石組遺構（SW ４）実測図（1/30）……21
第12図　ＫＳＴ０７－１石組遺構（SW １～４）立面図（1/60）……22
第13図　ＫＳＴ０７－１調査区土層断面図（1/60）……23
第14図　ＫＳＴ０７－１出土土器実測図（1/4）……25

表　目　次

第１表　発掘届出件数月別一覧表……1
第２表　主な発掘調査一覧表　……1～3
第３表　河内長野市遺跡地名表　……5

図　版　目　次

図版１　遺構　ＥＢＳ06－１　第１調査区調査前状況（西から）
第１調査区調査前状況（東から）
図版２　遺構　ＥＢＳ06－１　第１調査区全景（西から）
第１調査区北側拡張部（北から）
図版３　遺構　ＥＢＳ06－１　第１調査区検出遺構（ＳＫ１）
第１調査区検出遺構（ＳＫ２）
図版４　遺構　ＥＢＳ06－１　第２調査区調査前状況（東から）
第２調査区完掘状況（東から）
図版５　遺構　ＥＢＳ06－１　第２調査区全景（東から）
図版６　遺構　ＫＳＴ07－１　調査区全景（南から）
遺構検出状況（ＳＷ４）
図版７　遺構　ＫＳＴ07－１　遺構検出状況（ＳＤ３・４）
遺構検出状況（ＳＷ１～３）（南から）
図版８　遺構　ＫＳＴ07－１　遺構ＳＷ１～３（北から）
遺構ＳＷ１・３（北から）
図版９　遺物　ＫＳＴ07－１　出土遺物
ＥＢＳ06－１　出土遺物

第１章　調査の状況

平成19年の文化財保護法93・94・96・97条による発掘届及び発掘通知の件数は、総数154件、そのうち発掘届142件、発掘通知11件、新規発見届０件、新規発見通知１件である。

今年の発掘届にみられる原因者の状況は、過去に行なわれた大規模住宅造成地の分譲などの影響で例年よりも増加している。

第１表　発掘届出件数月別一覧表

（平成19年１～12月）

	平成18年度			平成19年度									総数
	１月	２月	３月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	
発掘届（93条）	7	3	8	10	20	13	9	14	17	12	12	17	142
発掘通知（94条）	0	1	0	0	2	4	1	0	1	2	0	0	11
発見届（96条）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
発見通知（97条）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

第２表　主な発掘調査一覧

遺跡名	調査期間	申請者	申請面積(㎡)	用途	種別	区分	備考
市町東遺跡 ICE06－1	H19.1.18	河内長野市長	700.00	下水道	立会		なし
市町東遺跡 ICE06－2	H19.1.18	(株)不動ホーム	493.07	擁壁	発掘		なし
高野街道 KYR06－3	H19.2.8	個人	722.01	共同住宅	発掘	国庫	なし
烏帽子形城跡 EBS06－1	H19.2.21 ～3.20	河内長野市教育委員会		学術調査	発掘	国庫	本書掲載
双子塚古墳跡	H19.3.8	(株)中西可鍛鋳鉄所	409.11	自家用倉庫	発掘		なし
高野街道 KYR06－4	H19.3.12	個人	176.25	個人住宅	発掘		なし
喜多町遺跡 KTC06－2	H19.3.19	個人	810.76	店舗付共同住宅	発掘	国庫	中世の土師質土器・瓦器
高向遺跡 TKO06－3	H19.3.20	個人	329.40	個人住宅	発掘	国庫	古墳時代の須恵器、中世の土師質土器・瓦器
烏帽子形城跡・高野街道 EBS06-6	H19.3.28	個人	136.63	宅地造成	発掘	国庫	なし
高向遺跡 TKO07－1	H19.4.12	個人	197.13	個人住宅	発掘		なし

双子塚古墳跡	H19.4.13	個人	201.73	個人住宅	発掘		なし
高向遺跡 TKO07－2	H19.4.19	全農エネルギー(株)	4011.00	ガソリンスタンド	発掘		なし
高野街道 TKR07－1	H19.4.26	(株)カイト	1230.36	分譲住宅	発掘		なし
三日市宿跡 MCS07－1	H19.4.26	眞教寺	158.70	寺院用会館	発掘		なし
西代藩陣屋跡 NDH07－1	H19.5.14～5.15	河内長野市	383.96	校舎増築	発掘		なし
小塩遺跡 OSO07－1	H19.5.15	(株)ジョーコーポレーション	128.83	分譲住宅	立会		古墳時代の石器・須恵器・土師器、中世の土師質土器
高野街道 TYR07－2	H19.5.28	個人	161.94	個人住宅	発掘		なし
高野街道・三日市宿跡 TYR07－3	H19.6.1	個人	332.52	共同住宅	発掘		中世から近世の土師質土器
三日市北遺跡・三日市宿跡 MIN07－1	H19.6.6	個人	243.73	個人住宅	発掘		なし
上原遺跡 UHR07－1	H19.6.6	河内長野市長	27.00	下水道	立会		なし
塩谷遺跡 SIO07－1	H19.6.19	個人	272.50	個人住宅	発掘		なし
膳所藩代官所跡 ZZH07－1	H19.6.22	個人	80.84	個人住宅	発掘		なし
菱子尻遺跡 HKS07－1	H19.7.4	個人	370.42	共同住宅	発掘		なし
市町東遺跡 ICE07－1	H19.7.12	辰巳工務店(株)	2354.76	宅地造成	発掘		中世の瓦器
三日市北遺跡 MIN07－1	H19.7.25	個人	249.92	共同住宅	発掘		古墳時代の須恵器・土師器
高野街道 KYR07－4	H19.7.26	個人	380.52	個人住宅	発掘		なし
小塩遺跡 OSO07－2	H19.8.1	(株)ジョーコーポレーション	100.06	分譲住宅	立会		なし
小塩遺跡 OSO07－3	H19.8.2	(株)ジョーコーポレーション	100.45	分譲住宅	発掘		なし
小塩遺跡 OSO07－4	H19.8.21	(株)ジョーコーポレーション	100.02	分譲住宅	立会		古墳時代の須恵器、中世の瓦器
小塩遺跡 OSO07－5	H19.8.23	(株)ジョーコーポレーション	122.97	分譲住宅	立会		なし
小塩遺跡 OSO07－6	H19.8.24	(株)ジョーコーポレーション	100.02	分譲住宅	立会		なし
小塩遺跡 OSO07－7	H19.8.31	(株)ジョーコーポレーション	100.02	分譲住宅	立会		なし

小塩遺跡 OSO07－8	H19.9.3	(株)ジョーコーポレーション	100.59	分譲住宅	立会		なし
日野観音寺遺跡 HKT07－1	H19.9.3	個人	256.86	個人住宅	発掘		なし
市町東遺跡 ICE07－2	H19.9.5	個人	367.72	個人住宅	発掘		なし
小塩遺跡 OSO07－9	H19.9.18	(株)ジョーコーポレーション	100.07	分譲住宅	立会		なし
小塩遺跡 OSO07－10	H19.9.21	(株)ジョーコーポレーション	100.39	分譲住宅	立会		なし
三日市遺跡 MIC07－1	H19.10.22	個人	154.79	個人住宅	発掘		なし
尾崎北遺跡 OSK07－1	H19.10.26	(有)テイクハウス	1027.70	分譲住宅	発掘		なし
高野街道 KYR07－5	H19.11.1	(株)アローラ	200.05	分譲住宅	発掘		なし
小塩遺跡 OSO07－11	H19.11.8	(株)ジョーコーポレーション	100.07	分譲住宅	立会		なし
烏帽子形城跡 EBS07－1	H19.11.12	(株)富士木材	5794.26	分譲住宅	発掘		なし
膳所藩代官所跡 ZZH07－2	H19.11.13	個人	441.27	共同住宅	発掘		なし
膳所藩代官所跡・高野街道 ZZH07－3	H19.11.16	個人	480.23	長屋住宅	発掘		なし
清水遺跡 SNZ07－1	H19.11.19～11.21	河内長野市	520.00	道路	発掘		なし
観心寺遺跡 KST07－1	H19.11.19	河内長野市教育委員会	100.00	範囲確認調査	発掘		本書掲載
高野街道 KYR07－1	H19.11.26	個人	103.82	個人住宅	発掘		なし
鳴尾遺跡・塩谷遺跡 DOD07－1	H19.12.12	(株)大阪土地建物	2967.21	分譲住宅	発掘		なし
三日市北遺跡 MIN07－2	H19.12.18～12.21	河内長野市	5000.00	道路	試掘		弥生土器、中世の土師質土器
小塩遺跡 OSO07－12	H19.12.19	(株)ジョーコーポレーション	100.17	分譲住宅	立会		なし
三日市北遺跡 MIN07－3	H19.12.20	ＧＳ曙興産(有)	498.46	分譲住宅	発掘		なし

第１図　河内長野市遺跡分布図（1/40000）

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降
3	観心寺遺跡	社寺	平安以降
4	大師山古墳	古墳	古墳（前期）
5	大師山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大師山遺跡	集落・生産	弥生（後期）・平安
7	興禅寺遺跡	社寺	中世以降
8	烏帽子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降
9	塚穴古墳	古墳・墳墓	古墳（後期）・近世
10	長池窯跡群	生産	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺遺跡	社寺	平安以降
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降
15	日野観音寺遺跡	社寺・生産	縄文・平安～近世
16	地蔵寺遺跡	社寺	中世以降
(17)	岩湧寺遺跡	社寺	平安以降
18	五ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	烏帽子形城跡	城館・生産	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	縄文・古墳～中世
22	烏帽子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯跡	生産	中世
24	塩谷遺跡	散布地	縄文～近世
25	流谷八幡神社	社寺	平安以降
26	蟹井淵南遺跡	散布地	中世
27	蟹井淵北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	社寺	中世
30	岩瀬薬師寺遺跡	社寺	中世以降
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳？	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
(34)	滝畑埋墓	墳墓	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村観音堂跡	社寺	近世
(37)	西の村観音堂跡	社寺	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳	古墳
42	宮山遺跡	集落	縄文・奈良
43	西代藩陣屋跡	散布地・城跡	飛鳥～奈良・江戸
44	上原町墓地	墳墓	近世
45	惣持寺跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ヶ池遺跡	散布地	縄文
48	上原遺跡	散布地	旧石器～近世
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降
52	膳所藩代官所跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	菱子尻遺跡	散布地・社寺	縄文～近世
55	河合寺城跡	城館	中世
56	三日市遺跡	集落・古墳他	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	中世
58	高木遺跡	散布地	縄文
59	汐の山城跡	城館	中世
60	峰山城跡	城館	中世
61	稲荷山城跡	城館	中世
62	国見城跡	城館	中世
63	旗蔵城跡	城館	中世
64	権現城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降
(66)	葛城第15経塚	経塚	平安以降
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降
68	庚申堂遺跡	社寺	近世以降
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐近城跡	城館	中世
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16経塚	経塚	平安以降
(73)	葛城第18経塚	経塚	平安以降
(74)	葛城第19経塚	経塚	平安以降

番号	文化財名称	種類	時代
(75)	笹尾塞	城館	中世
(76)	大沢塞	城館	中世
(77)	三国山経塚	経塚	平安以降
(78)	光滝寺遺跡	社寺	中世以降
(79)	狼子城跡	城館	中世
80	蟹井淵神社遺跡	社寺	中世以降
81	川上神社遺跡	社寺	中世以降
82	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
83	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安～近世
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	大日寺遺跡	社寺・古墳・墳墓	弥生～近世
87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
88	小塩遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塩遺跡	集落	古墳（後期）
90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世瓦窯	生産	近世
96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
97	上田町窯跡	生産	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
99	西之山町遺跡	散布地	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚遺跡	墳墓	中世
(105)	葛城第17経塚	経塚	平安以降
106	薬師堂跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	生産	中世
108	寺元遺跡	集落・社寺	縄文・奈良・中世
(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
110	法師塚古墳跡	古墳	古墳
111	山上講山古墳跡	古墳	古墳
112	西浦遺跡	集落	古墳・中世・近世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	栄町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
116	錦町遺跡	散布地	中世
(117)	太井遺跡	散布地	縄文・中世
118	錦町北遺跡	集落	弥生・中世・近世
119	市町西遺跡	集落	縄文・中世
120	栄町南遺跡	集落	中世
121	栄町東遺跡	散布地	弥生・中世
122	楠町東遺跡	散布地	弥生
123	汐の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
126	増福寺	社寺	中世以降
127	三昧城遺跡	墳墓・城跡	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
134	地蔵寺東方遺跡	墳墓	弥生・鎌倉
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかしあ台遺跡	散布地	近世
138	岩瀬北遺跡	集落	中世
139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世
140	昭栄町東遺跡	散布地・池跡	縄文・中世・近世
141	三日市北遺跡	集落	縄文・弥生～中世
142	三日市宿跡	宿駅に伴う街並	中世～近世
143	上田町宿跡	宿駅に伴う街並	中世～近世
144	滝尻遺跡	散布地	縄文・古代・中世
145	市町北遺跡	散布地	中世
146	太白遺跡	散布地	中世
147	高向神社南遺跡	集落	古墳
148	塚遺跡	散布地	弥生・古墳・中世

（　）は地図範囲外　*は街道につき地図上にはプロットせず

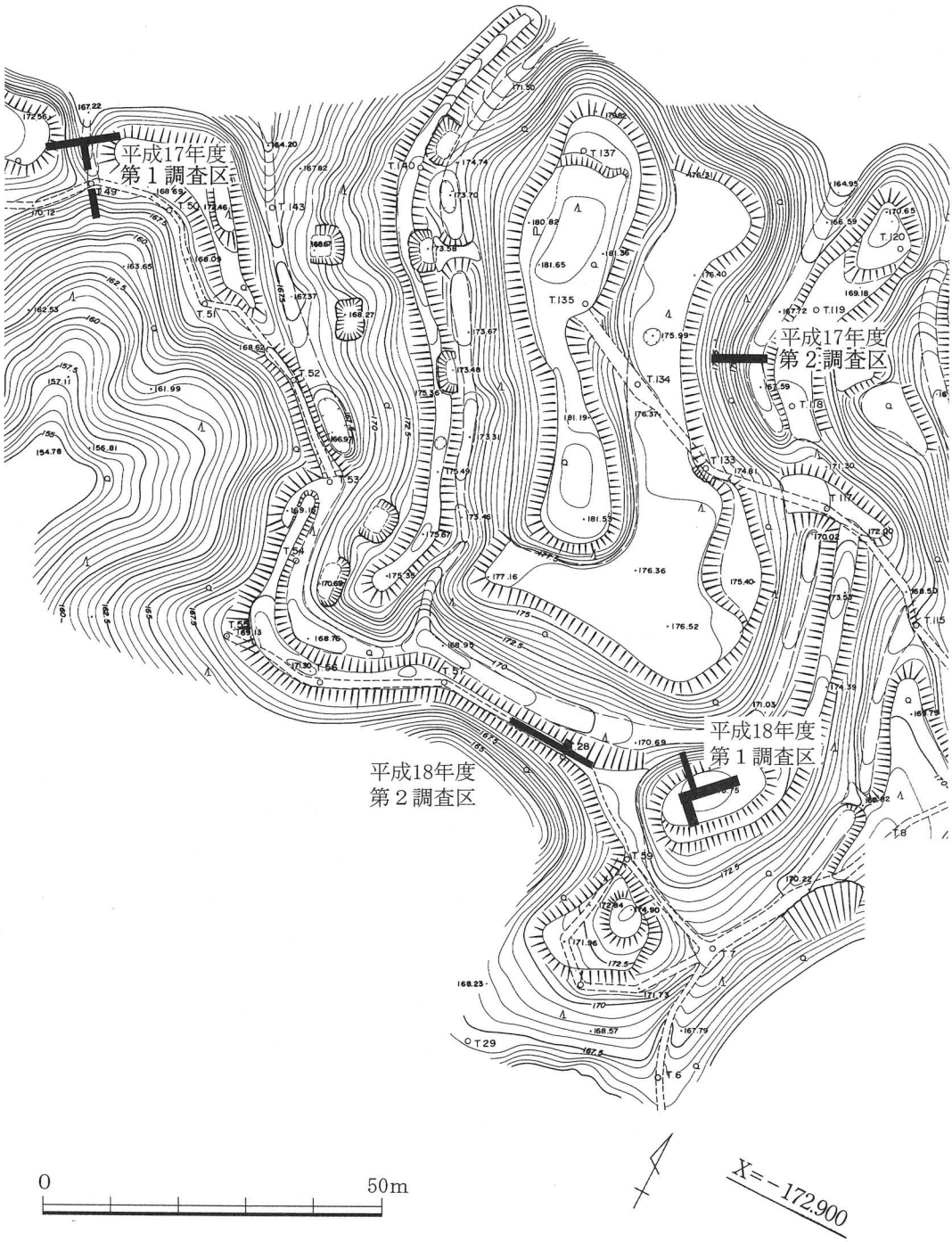
第3表　河内長野市遺跡地名表

第２章　調査の結果

第１節　烏帽子形城跡（ＥＢＳ06－１）

１．位置と環境

烏帽子形城跡は、市内南部に位置する岩湧山系より北方向に派生する烏帽子形山の山頂部に位置する。烏帽子形山の標高は、182mであり、それほど高くはないが、部分的に急な斜面を有する腰高い丘陵であり、市内を一望することができる。烏帽子形山の西側は石



第２図　EBS06－１　調査区位置図（1/1,000）

川が南西から北東へ向かって流れており、東側は石見川が蛇行しながら南から北へ流れている。両河川は、烏帽子形山の北東300mで合流している。したがって、南側を除いた東・西・北の３方向は、これらの河川に囲まれている。

烏帽子形城跡の東側裾部には、高野街道が南北に走っている。高野街道は烏帽子形城跡の北約１kmの地点で、東高野街道と西高野街道が合流し一本化した後、この城に向かって一度、西方向に折れた後、東方向に再び折れて、烏帽子形城跡の南方向約500mにある近世に宿場町として栄えた三日市宿跡へ至る。その後は、国境の紀見峠を越えて紀伊へ至る。烏帽子形城跡の南麓には和泉路が走っており、両路を押さえる交通の要衝に位置しているといえる。

周囲には、北方向に、栄町遺跡、栄町東遺跡、北東方向に大日寺遺跡、東方向に喜多町遺跡、南東方向に上田町遺跡が、西方向にはやや離れるものの上原北遺跡が位置している。南方向には小塩遺跡が位置している。

栄町遺跡・栄町東遺跡は、弥生時代・中世の遺物散布地である。大日寺遺跡は、これまでの調査で、弥生時代の溝、古墳、中世の墓、建物跡などが検出されている。平成11年度の調査で検出した中世の墓からは、多くの12～13世紀にかけての貿易陶磁が出土している。喜多町遺跡は古墳時代の集落遺跡であり、中世の遺構・遺物も若干検出されている。上田町遺跡は、古墳時代・中世の遺物散布地である。上原北遺跡は、中世の集落遺跡であり、平成６年と平成12年の調査によって、14世紀～15世紀にかけての掘立柱建物跡群、炭焼窯群などが検出されている。居住域と手工業生産域が一体となって位置しており、当時の集落の生業を窺う上で重要である。小塩遺跡は縄文～奈良時代の複合遺跡であり、古墳時代後期の集落遺跡が検出されている。

なお、烏帽子形城跡の北東約１kmにある石見川の対岸には河合寺城跡が、北東４kmには金胎寺城跡が位置している。

２．遺跡の概略

烏帽子形城跡は、「高低差のある堀・土塁を効果的に配置し」、長方形をなす主郭と腰曲輪を一体的に防御する点が特徴としてあげられる（河内長野市教委2001）。城域の規模は、東西200m、南北150mの規模を有する。

最高所を占める中心部には主郭が位置している。主郭の規模は東西15m、南北50mであり、南北に細長い形状を呈している。この場所は、昭和63年に発掘調査が行われており、礎石建物跡が検出され、瓦、土師皿、土師質土釜、瀬戸美濃の天目茶碗、貿易陶磁の白磁が出土している。瓦は、平瓦と丸瓦が中心であり、若干の軒平瓦・掛丸瓦が出土している。丸瓦の凹面に残るユビキ痕はすべてＡで、斜位に施されていた。また、瓦当に残る軒平瓦の文様はいずれも青海波紋であり、15世紀後半から16世紀前半の技術で製作されている。白磁は、端反皿であり、16世紀第３四半期のものである。瀬戸美濃の天目茶碗は、16世紀

第３四半期のものである。土釜は、土師質に焼成されており、頸部は直線的に立ち上がり、口縁端部は内傾している。16世紀前半の特徴をしめしている。

烏帽子形城跡の構造にあらためて、検討を加えた中井均氏は、この主郭が「東西幅５～15mと非常に狭く、兵の駐屯場所としての郭としてはふさわしくない。」とし、多聞櫓・櫓を配した大土塁として構築された可能性を示唆した。また、城郭に瓦葺建物が導入されるのが、安土城以降であることを述べ、主郭で見つかった15世紀後半～16世紀前半の瓦については、より古い時代に葺かれた近隣の寺院からの転用品と推測した（中井2001）。

主郭の東側及び南側には、腰曲輪がめぐっている。腰曲輪は東西約35m、南北約70mの規模を有しており、主郭との高低差は約3.5mある。昭和63年の調査では、この場所に２本の調査区が設定され、複数の整地層が検出されており、瓦、備前の擂鉢・壷、土師皿、砥石が出土している。遺物はいずれも16世紀後半のものである。なお、中井氏は、この腰曲輪と主郭を合わせた範囲を主郭として把握している。

主郭と腰郭曲輪の周囲には、横堀がめぐっている。横堀は、土橋によって分断されており、土橋を挟んで食い違いになるように掘られている。現状での地表面観察からは、横堀底部に仕切り等の施設はみうけられない。堀底部と曲輪部の高低差は、３～４m程度である。横堀の発掘調査については、腰曲輪東側個所を平成18年度に行なっており、土塁上面から横堀底面までの深さが本来、１m程度であったことが明らかになっており、底部から、瓦に混じって、鋤柄編年のⅡ－３類（鋤柄1987）に分類される15世紀中葉の瓦質土器甕が出土した。

腰曲輪に接続する土橋は、幅７～８m、長さ15mある。腰曲輪に通じる場所は、虎口となっており、ここを通る道が城の大手となっている。

横堀の外周には、土塁がめぐっている。土塁は、幅10～15mであり、横堀底部から土塁上面までの比高差は、現状で0.5～0.8m程度である。

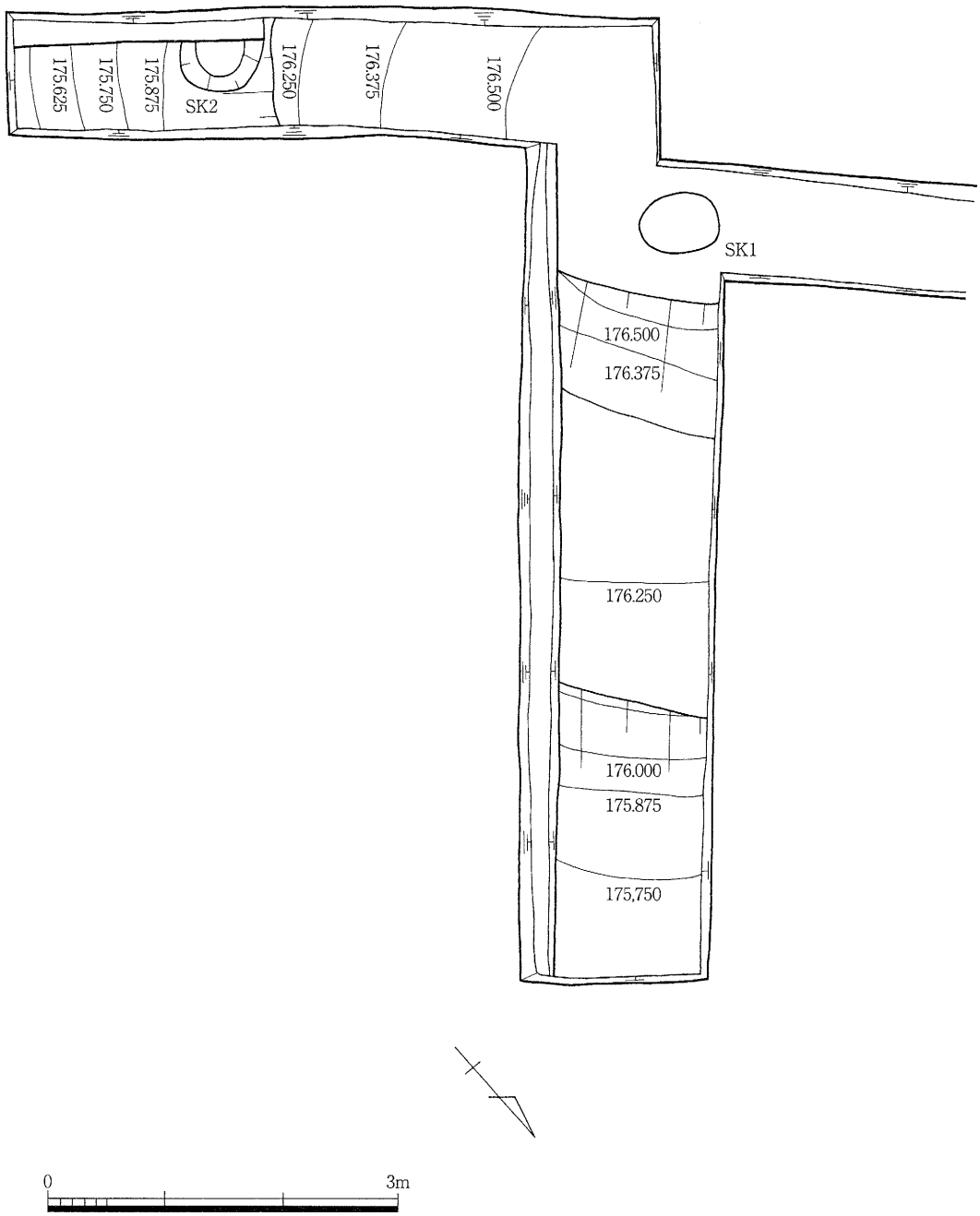
土塁の外側には、西・東部で部分的にさらに横堀がめぐっている。このような外側の横堀は、織豊期に改築された際に増設されたものと推定されている（中井2001）。

２重の横堀のさらに外側には城域の西端と東端で尾根を切断するために、堀切が尾根筋に直行するように掘られている。

村田修三氏は、以上のような烏帽子形城跡の基本形が「コ」の字状であることを述べ（村田1987）、中井氏も、郭が方形を呈する古い様相を示す構造が基本となり、改修が後に加えられたものとしている（中井2001）。

３．調査に至る経緯と目的

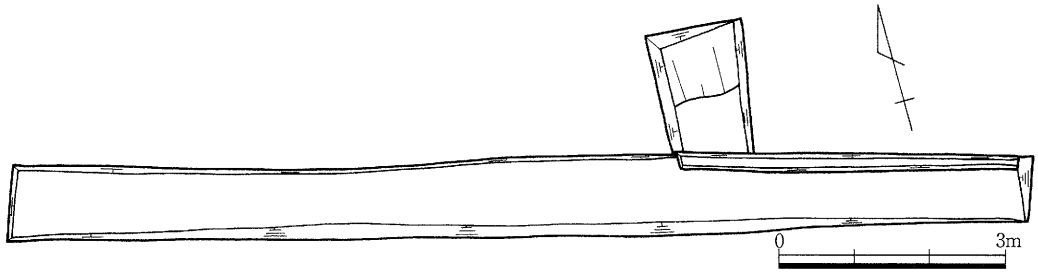
本次調査は、市指定史跡である烏帽子形城跡について今後の保存・活用のための基礎的な資料を得るために行った。前節で述べたように、主郭及び腰曲輪については、すでに調査が行われており、一定の成果をあげている。今回の調査は、これまで十分な調査が行わ



第３図　EBS06－1　第１調査区平面図（1/60）

れていなかった土塁および横堀について、これらの本来の形状や上面における遺構の有無を確認することを目的として行なった。

調査区の設置場所については、腰曲輪周辺をめぐる土塁・横堀の南東隅角部（第１調査区）と南部（第２調査区）の２個所に設定した（第２図参照）。土塁南東隅角部（第１調査区）については、他の土塁頂部よりも標高が高く、上面は、広く平坦な面をなしており、これまでにも櫓台である可能性が指摘されていた（中井2001）。この個所で東西方向に1.5m×８mの調査区を設置し、北西方向・南東方向にそれぞれ斜面に向けて調査区の拡張を行った。土塁南部（第２調査区）については、土塁上面に築かれた柵列などの遺構の検出を目的として、東西方向に１m×13.5mの調査区を設置した。



第４図　EBS06－1　第２調査区平面図（1/100）

調査は平成19年２月21日に開始し、平成19年３月20日に終了した。調査では、まず調査区周辺の枯れ木・落ち葉の除去と除草を行い、現況での写真の撮影と測量を行った後、人力により遺構面まで掘り下げ、遺構検出を試みた。一方で、調査区壁で土層の観察を行い、記録の作成を行った。遺構については、第１調査区で土坑が検出された。第２調査区からは、遺構が検出されなかった。遺物は、第１調査区の堆積土から瓦・備前焼擂鉢が出土した。

４．第１調査区（第３・５図、図版１～３・９）

第１調査区は、腰曲輪周辺をめぐる土塁・横堀の南東隅角部に1.5m×８mの規模で設置し、北方向・南方向にそれぞれ調査区の拡張を行なった。基本層序は、①10YR3/2黒褐色腐食土層、②10YR7/6明黄褐色礫まじりシルト層となる。地表下0.2mで盛土上面に達した。北方向拡張部分では、土塁の法面の検出を行なったが、調査の結果、土塁法面で地山と盛土の境界線が検出でき、土塁が地山の削り出しと、盛土の両方によって構築されていることが明らかになった。

遺構については、土坑を検出し、遺物は備前焼の擂鉢、瓦が出土した。

〔ＳＫ１〕

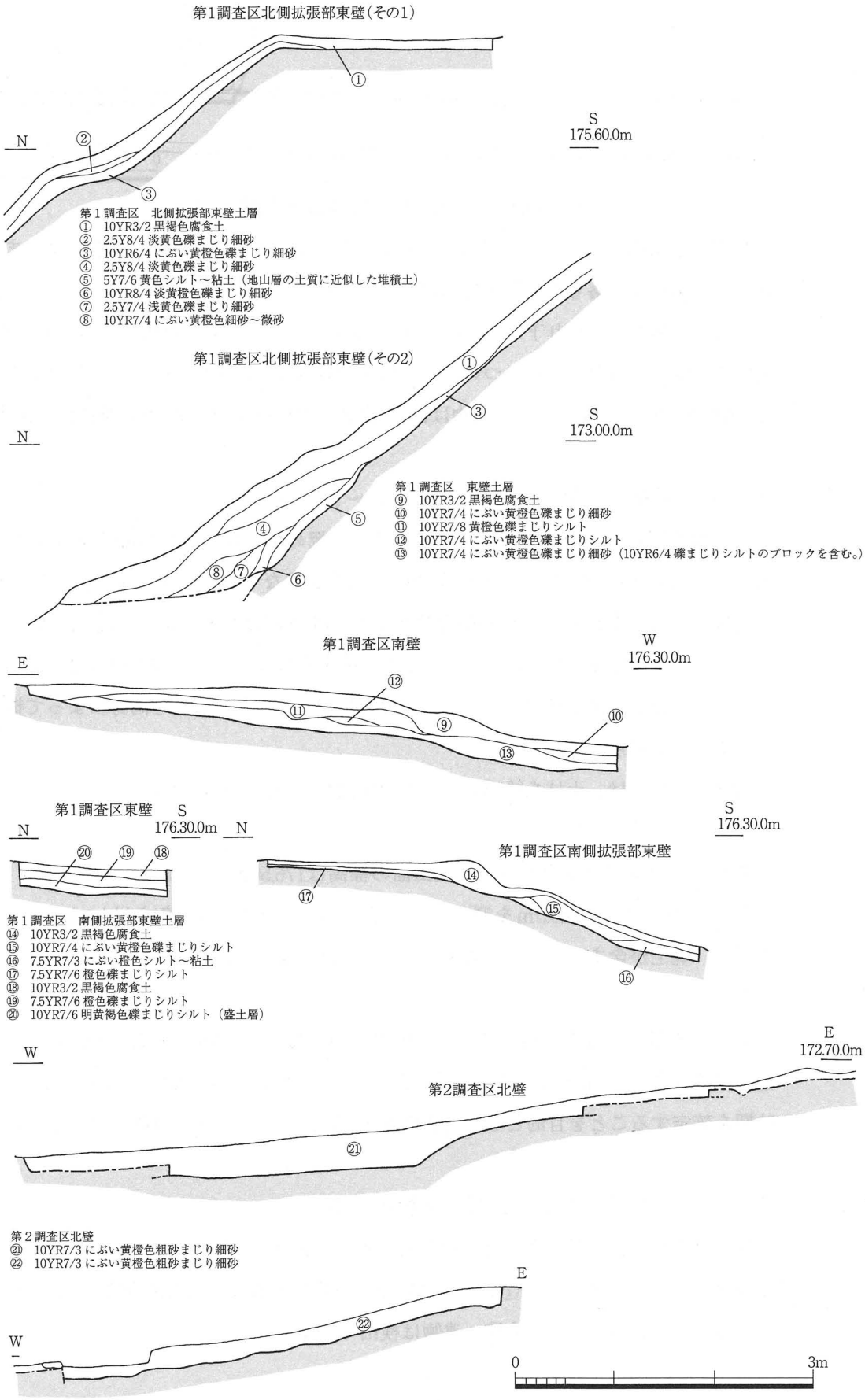
調査区の西端部で検出された。検出面の標高は176.50mである。形状は楕円形を呈し、規模は長径0.7m、短径0.5mを測る。堀形は、比熱を受け、赤褐色を呈しており、遺構埋土には、焼土が含まれていた。遺構埋土の除去は行なっていない。

〔ＳＫ２〕

調査区の南側拡張部で検出された。検出面の標高は175.875m～176.250mである。西半部は調査区外に存在するものの、楕円形を呈し、直径は0.6m程度であると考えられる。時期を確定することを目的として、遺構埋土の除去を行ったが、遺物は出土しなかった。

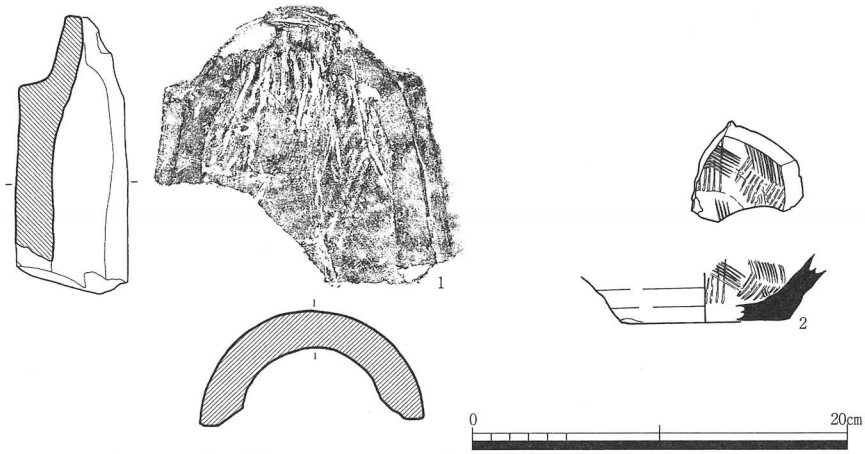
５．第２調査区（第４・５図、図版４・５）

第２調査区は、主郭および腰曲輪周辺をめぐる土塁・横堀の南部に１m×13.5mの規模で設置した。基本層序は、①10YR7/3にぶい黄橙色粗砂まじり細砂層となる。地表下0.3mで盛土上面に達したが、遺構・遺物は検出できなかった。



第５図　EBS06－1　土層断面図（1/60）

第６図　鳥帽子形城跡測量図（1/1,000）



第７図　EBS06－1　出土遺物実測図（1/4）

６．まとめ

平成18年度の烏帽子形城跡範囲確認調査では、主郭・腰曲輪の周囲に築かれた土塁と横堀について、南東隅角部と南部の調査を行なった。

土塁は南東隅角部が、他の場所よりも高くなっており、土塁上面も他の場所よりも広くなっている。このため、この場所から櫓跡等の検出が見込まれ、本次調査では第１調査区の設定を行い、調査を行なった。調査の結果、焼土坑等が検出できたものの、建物跡等は検出されなかった。

横堀については、土塁に沿ってめぐっているが、第１調査区から調査区を拡張させて、南東隅角部を調査した。横堀に関しては、平成17年度にも本次調査とは異なる場所で調査を行なっており、この２つの場所を比較すると、それぞれ異なった方法で土塁と横堀が構築されていることが明らかとなった。

平成17年度調査箇所では、まず、周囲が平坦に造成され、この後、この平坦地の外縁部に盛土を行なうことで土塁を構築し、平坦地の内側には盛土を行なわず、横堀としていた。

これに対して、今回の調査区（第１調査区）では、まず、横堀を掘り、横堀から排出された土を使って土塁が構築されているものと推定できた。

本次調査で観察できた築造方法が一般的なものと考えられ、平成18年度調査箇所に見でみつかった平坦な造成面は捨郭の痕跡と想定する。本来、兵が屯する曲輪であった場所を、改修して土塁を築いた可能性を指摘しておきたい。なお、文献史料によると、天正12年（1584）の『宇野主水日記』に羽柴秀吉の命によって岸和田城主中村一氏が烏帽子形城を改修した記事が登場する。

参考文献

・河内長野市教育委員会2001『河内長野市城館分布調査報告書』
・河内長野市教育委員会2006『河内長野市埋蔵文化財調査報告書ＸＸＶ』
・中井均2001「烏帽子形城の構造について」『河内長野市城館分布調査報告書』
・村田修三1987『図説中世城郭事典』第３巻
・鋤柄俊夫1987「中世前期における大阪南部の甕生産」『考古学と地域文化』

第２節　観心寺遺跡（ＫＳＴ07－１）

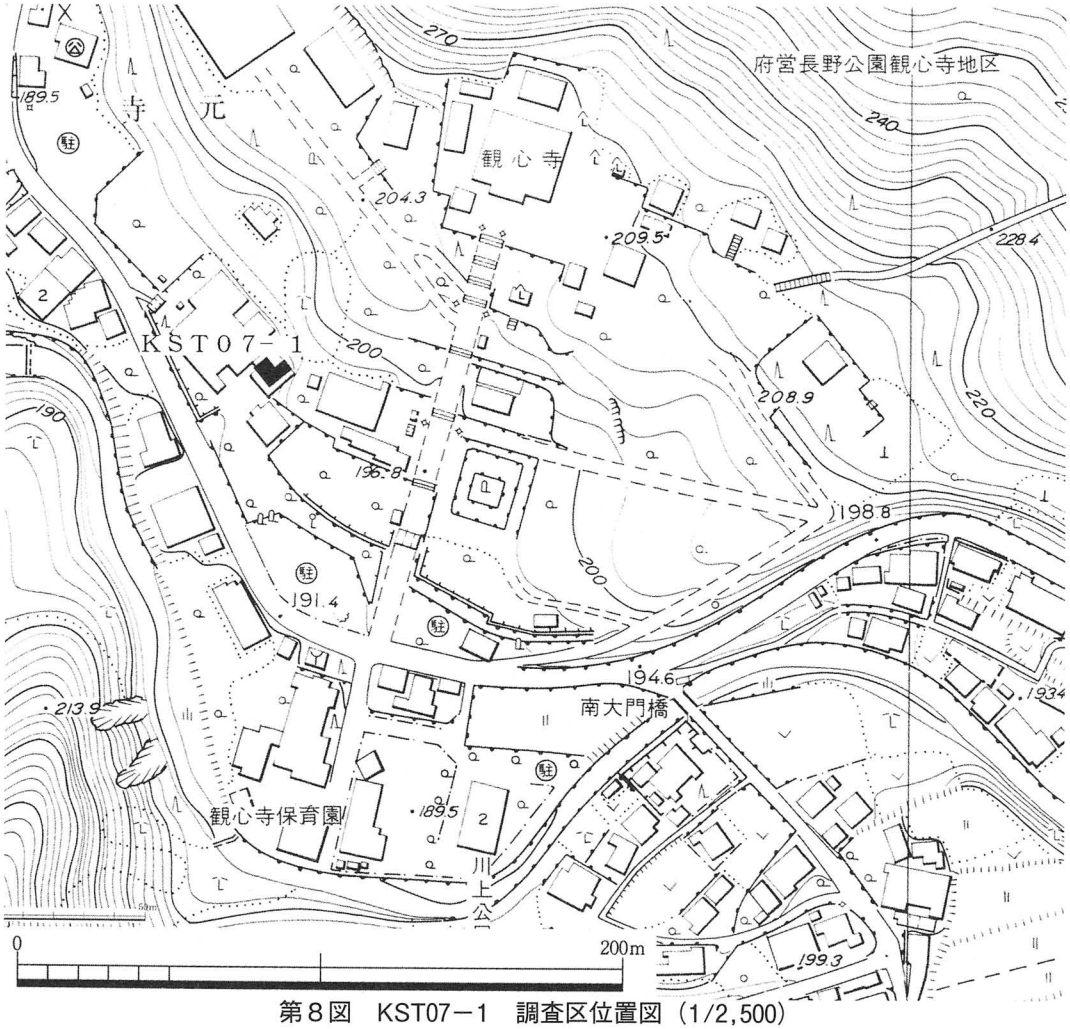
１．遺跡の概略

観心寺遺跡は、石川の支流である石見川北岸の丘陵南斜面に位置する。石見川沿いには、通称大沢越えといわれる奈良盆地に向かう道が東西にはしっており、これは市内を南北に縦断し、京都、河内を経て高野山と結ぶ高野街道にも接続している。

山号は、檜尾山であり、創建は役小角によるものと伝えられているが、天長２年（825）～天長４年（827）に空海の弟子実恵と、その弟子真詔によって再興されたと伝えられている。主要伽藍を中心として周囲には、中院、槇本院などの子院が現在でも残っており、全盛期には、100近い子院が存在したと言われている。

観心寺は、金剛寺に続き南北朝時代の正平14年・延文４年（1359）に南朝の後村上天皇の行在所となった。

既往の発掘調査については、まず昭和54年から59年にかけて金堂の解体修理にともなって行われており、現金堂に先行する平安時代の前身建物が存在したことが確認され、平安時代から鎌倉時代にかけての瓦が出土した。平成元年には、ポンプ場の建設と送水管・電線管の埋設にともない、かつて子院があったとされる「奥谷坊」付近が調査され、石積井



第８図　KST07－1　調査区位置図（1/2,500）

戸や窯が検出され、平安時代から鎌倉時代にかけての遺物が出土した。

観心寺遺跡周辺の発掘調査については、寺元遺跡から10世紀以降に形成された集落と寺院の遺構が検出されている。集落については寺辺領である寺元の村落の一部であり、寺院遺構については子院のひとつである真福院である可能性が高いと考えられる。

2．調査に至る経緯と経過

本次調査は、国史跡である観心寺境内において、庫裏の建替えにともない行ったものである。本庫裏の建築については、平成17年11月に宗教法人観心寺から史跡地内で庫裏の建替えを行いたいとの申し出が河内長野市教育委員会にあった。協議の結果、遺構への影響が少なく、庫裏の建築が可能なスペースが確保できる場所を選定し、範囲確認調査の計画を策定した。あわせて現状変更許可申請書を大阪府教育委員会を経由して文化庁に提出した。現状変更については平成18年１月30日付で許可がおり、範囲確認調査（KST05－1）を平成18年３月24日～３月31日にかけて実施した。調査の結果、中世の遺構・遺物が検出され、建設と遺構の保存の両立が困難であることが分かった。この後、観心寺に対し建築予定地の変更を求め、新たな建設予定地での確認調査を行うことについての現状変更許可申請を、大阪府教育委員会を経由して文化庁に提出した。現状変更については平成18年５月23日付で許可がおり、範囲確認調査（KST06－1）を平成18年７月10日～８月７日にかけて実施した。この間の調査については、河内長野市文化財調査報告書第47輯による。

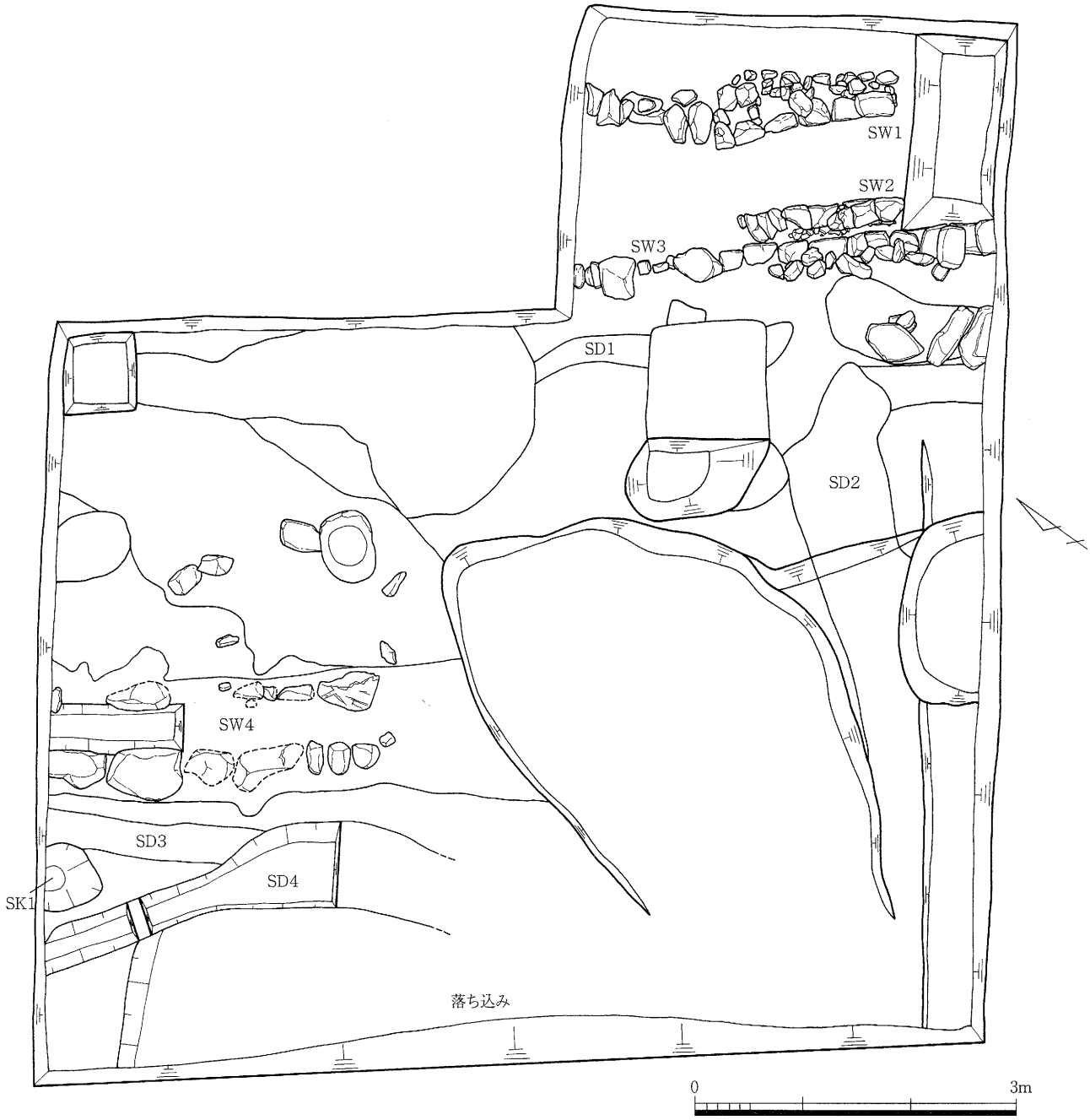
その後、範囲確認調査の結果を受けて、庫裏建設予定地を決定し、詳細設計の完成にあわせて庫裏建築のための現状変更許可申請書を宗教法人観心寺から受理し、平成19年１月26日付で大阪府教育委員会を経由して文化庁に提出した。現状変更については平成19年２月23日付で許可がおり、建築物の基礎が地下遺構へ与える影響を調査する事を目的とした発掘調査を旧建築物の解体撤去が終了した時期に合わせて、平成19年11月19日～12月21日にかけて実施した。

3．調査結果（第８～14図、図版６～９）

A．調査方法

本次発掘調査では、調査区を建設予定の建物に合わせて南北10m、東西９mに設定した。地表面より、深さ約0.5～0.6mで地山面に達し、地山面ですべての遺構の検出を行った。基本層序は現地表面から表土（10YR8/4浅黄橙色粗砂まじり細砂層）、遺物包含層（10YR5/2灰黄褐色細砂まじりシルト（10YR8/4シルトのブロックを含む）層）であった。なお、地山は、10YR8/4浅黄橙色シルト層であった。表土層を機械掘削し、遺物包含層以下を人力掘削した。

遺構面では、多くの攪乱坑が存在していた。これらの攪乱坑には、廃材や礫石が多く



第９図　KST07－1　調査区平面図（1/60）

投棄されていた。大正～昭和初期のものと考えられる旧建築物の建設にともなって、投棄されたものと考えられる。

保存を前提とした調査であったため、検出した遺構についてはできる限り完掘を行なわないようにし、遺構の時期･性格を明らかにするために最小限度の遺構掘削を行なった。

B. 調査区の状況

調査区を設定した場所は、本来丘陵斜面地であった場所が水平に造成されており、現地

表面の標高は、北側が193.100m、南側が192.600mであった。北方向10m以北は現地表でも急勾配の登り斜面となっている。南方向は比較的緩やかな斜面が、南方向約100mを流れる石見川まで続いている。

調査区の西側には、隣接して槇本院が位置し、東側にも隣接して庫裏がある。庫裏は、戦後の建築であるが、この庫裏は、地覆石に囲まれており、現庫裏が建っている場所には、これに先行する建物が建っていたことがわかる。

調査区を設定した場所は、観心寺の子院の一つである槇本院の敷地にあたる。江戸時代の絵図などからは、この場所に山林があったことが分かり、近代になってから整備が行なわれたようである。今回の現状変更によって取り壊された建築物には、洋釘が使われており、付近で、同様の釘が使われ始めるのが、大正年間以降であることから、当該建築物の年代も大正年間以降と考えられる。

遺構面は、北側が高く、南側に向かって緩やかな斜面となっており、比高差は、0.5mをはかる。遺構面には、多くの攪乱坑が穿たれていた。攪乱坑の多くが、近世～近代の遺物を含む遺物包含層上面から掘られていることが、土層の観察から明らかになっている。また、調査区壁にかかっていない攪乱坑も、埋土の状況からほぼ同時期のものと考えることができる。これらの攪乱坑には、廃材・礫石と瓦が大量に含まれていた。本次調査ではこれら礫石・廃材が投棄された攪乱坑以外のものを遺構として扱った。

C．検出遺構

遺構は、溝、石組遺構、土坑を検出している。

（1）溝

〔ＳＤ１〕

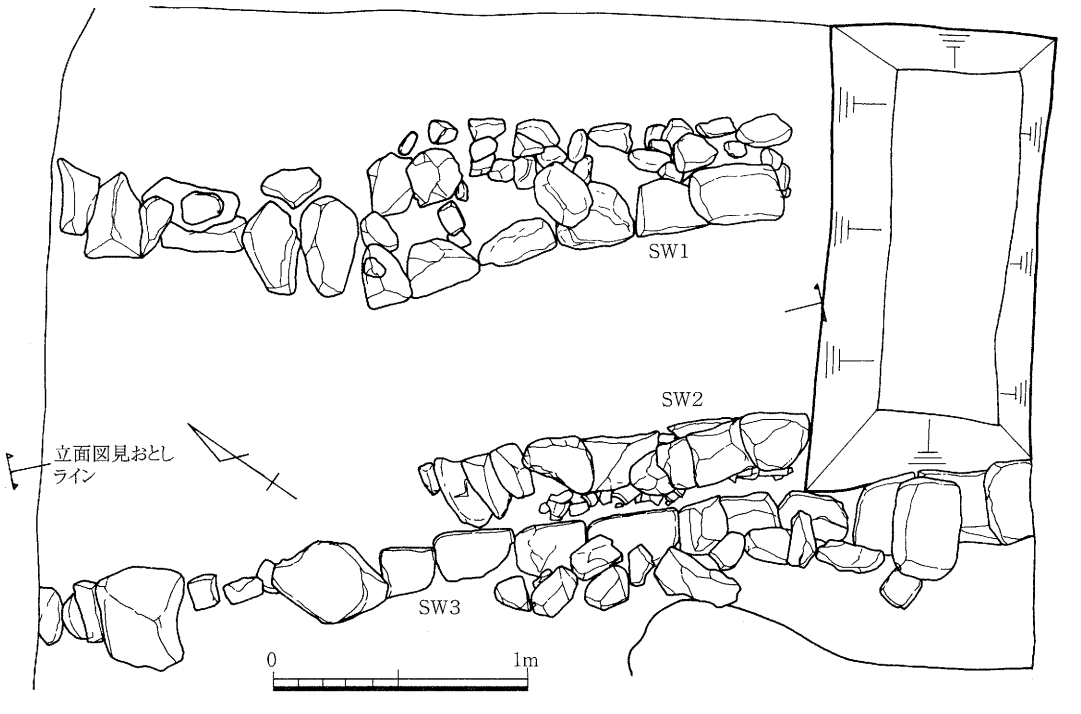
調査区の北半部で検出した。検出面の標高は193.20mであり、東西方向に伸びている。両端部を攪乱坑によって破壊されており、検出した規模は長さ1.1m、幅0.3mを測る。保存を目的とした発掘調査であったため、遺構掘削は行なっていないが、遺構埋土の土質が時期の確定ができたSD４に近似しており、時期も、近世以降のものであると考えられる。

〔ＳＤ２〕

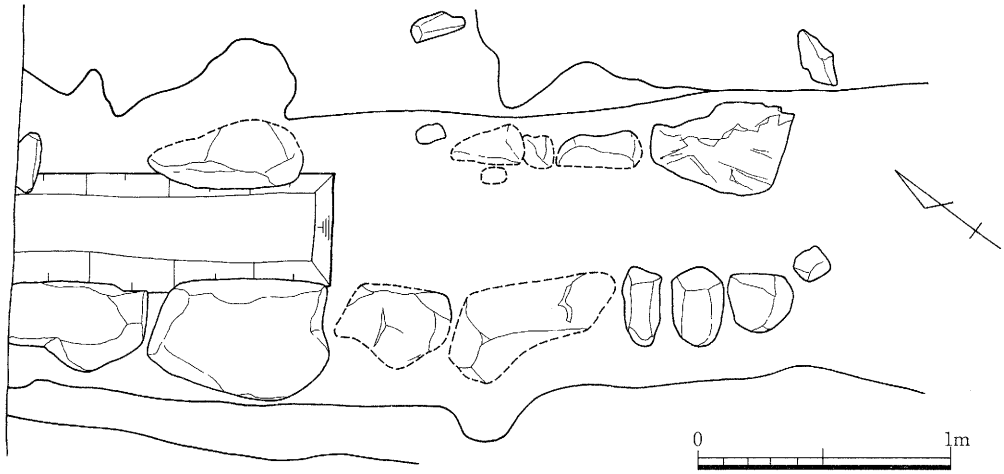
調査区の東部で検出した。検出面の標高は193.20～193.00mであり、南北方向に伸びている。遺構の南端部が、削平されており、検出した規模は、長さ5.3m、幅0.9mを測る。保存を目的とした発掘調査であったため、遺構掘削は行なっていないが、遺構埋土の土質がSD４に近似しており、時期も、近世以降のものであると考えられる。

〔ＳＤ３〕

調査区の南部で検出された。検出面の標高は193.00mであり、東西方向に伸びている。



第10図　KST07－1　石組遺構（SW 1～3）実測図（1/30）

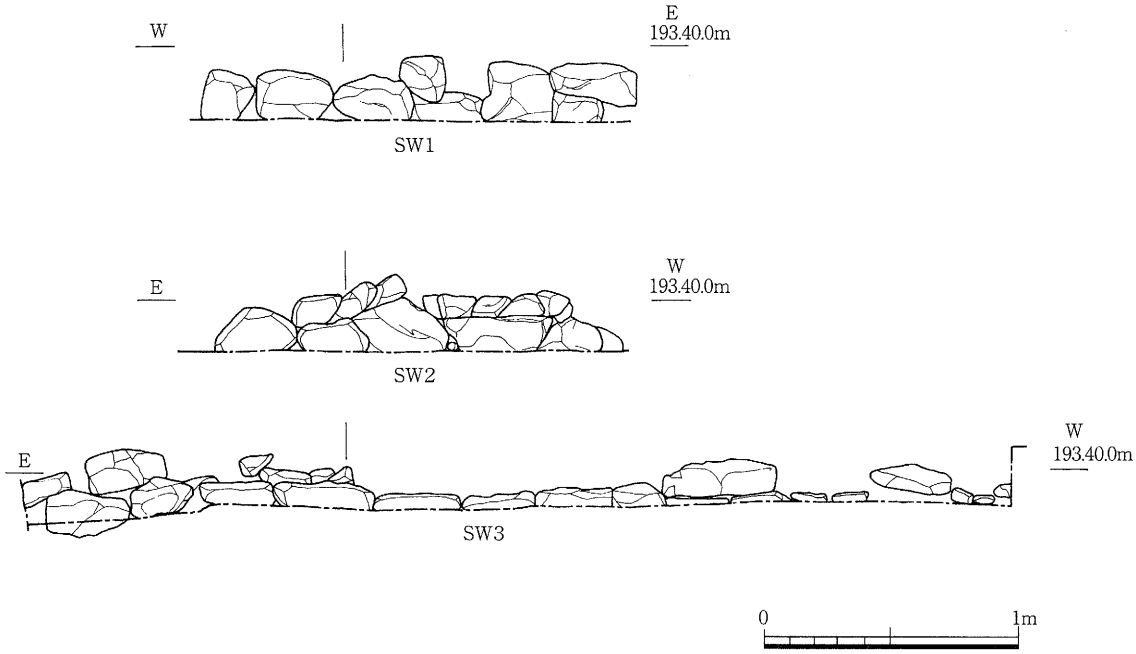


第11図　KST07－1　石組遺構（SW 4）実測図（1/30）

遺構の西側は調査区外へと伸びており、東側はSD４によって破壊されていることから全体の規模は不明であるが、検出した規模は、長さ２m、幅0.3mを測る。深さは、ＳＤ４の掘方法面で確認したところ、約0.4mであった。保存を目的とした発掘調査であったため、遺構掘削は行っていないが、遺構埋土がＳＤ４に近似しており、時期も、近世以降のものであると考えられる。

〔ＳＤ４〕

調査区の南部で検出した。検出面の標高は193.00mである。東西方向に屈曲しながら伸びており、SD３を破壊している。遺構の西部は調査区外へと伸び、東側は削平を受けていたことから全体の規模は不明であるが、検出した規模は、長さ４m、幅0.8m、深さ0.1



第12図　KST07－1　石組遺構（SW 1～4）立面図（1/30）

～0.4mを測る。当該遺構については、時期を確認することを目的として、遺構掘削を行なった。埋土は、10YR5/2灰黄褐色細砂まじりシルト層であった。

遺物は、中世の瓦器椀、土師質土器、近世の陶磁器等が出土している。

SD４は、近世以降のものと考えられる。

（2）土坑

〔ＳＫ１〕

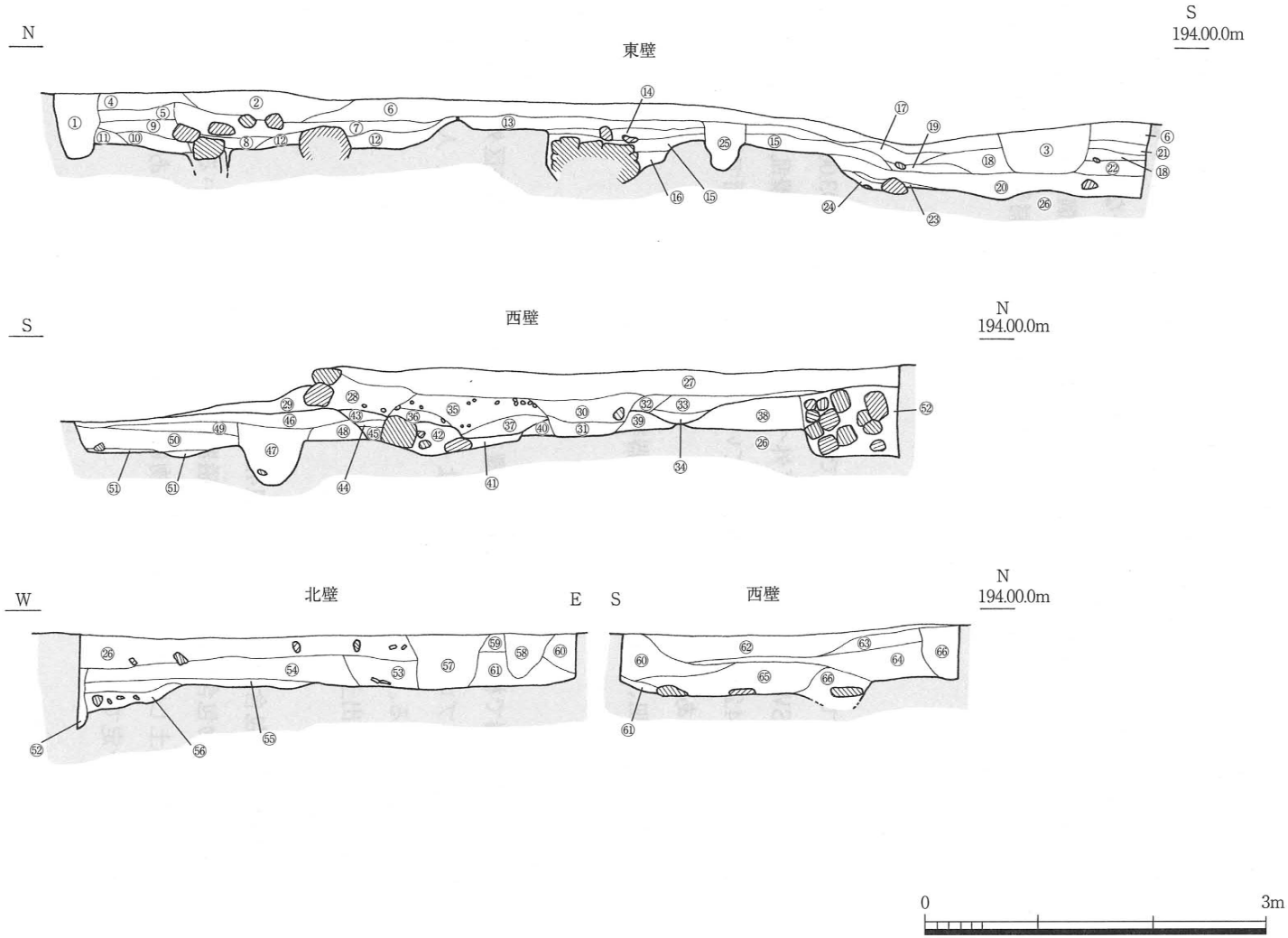
調査区の南部で検出した。検出面の標高は193.00mである。SK１の西半部は、調査区外にあり、正確な規模・形状は不明であるが、検出した範囲から推測すると、不正円形を呈し、規模は直径0.6m、深さ0.4mを測るものと考えられる。時期を確定することを目的として、遺構埋土の除去を行なった。埋土は、10YR5/2灰黄褐色細砂まじりシルト層であった。地山上に堆積した49層上面から掘削されていた。

遺物は出土していない。

（3）石組遺構

〔ＳＷ１〕

調査区の北端部で検出された。検出面の標高は193.43mである。東西方向に伸びていた。SW１は、東西方向にさらに調査区外へ伸張すると考えられるが、長さ1.8mにわたって検出している。残存高は最も遺存状況が良好な場所で、遺構面から0.25mであった。概ね１段目のみが遺存しており、部分的に２段目まで遺存していた。最下段の石材は、６個体検出した。石材は、平積によって積まれており、石材の大きさは、直径0.2m前後のものが多く使われていた。SW２と対をなすと推測でき、石組の側溝と考えられる。



調査区東壁土層
①撹乱
②撹乱
③撹乱
④ 2.5YR8/4 淡黄色シルト
⑤ 7.5Y6/1 褐灰色細砂まじりシルト
⑥ 2.5Y7/1 白灰色細砂まじり粗砂（１ｃｍ大の礫を少量含む。）
⑦ 10YR6/4 にぶい黄色粗砂まじり細砂（10YR8/4 シルトのブロックを含む。）
⑧ 10YR6/1 褐灰色シルト
⑨ 10YR5/2 灰黄褐色細砂まじりシルト（10YR8/4 シルトのブロックを含む。）
⑩ 7.5Y4/1 褐灰色シルト
⑪ 10YR6/1 褐灰色シルト（10YR8/4 シルトのブロックを含む。）
⑫ 10YR6/1 褐灰色シルト（10YR8/4 シルトのブロックを含む。）
⑬ 10YR7/2 にぶい橙色細砂（10YR6/3 シルトのブロックを多く含む。）
⑭ 10YR6/3 にぶい黄色粗砂まじりシルト
⑮ 10YR7/3 にぶい黄色細砂（10YR5/1 シルトのブロックを多く含む。）
⑯ 10YR8/2 灰白色細砂
⑰ 10YR6/1 褐灰色シルト
⑱ 10YR7/1 白灰色シルト（2.5Y8/6 シルトのブロックを少量含む。）
⑲ 7.5YR6/2 灰褐色シルトまじり細砂
⑳ 7.5YR6/1 褐灰色細砂（５ｃｍ大の礫を多く含む。）
㉑ 2.5Y8/6 黄色細砂まじりシルト（10YR7/1 シルトのブロックを含む。）
㉒ 7.5YR5/1 褐灰色細砂
㉓ 2.5Y8/4 淡黄色細砂
㉔ 10YR6/1 褐灰色シルト
㉕ 5Y7/1 明褐灰色シルト（地山グライド化している。）
㉖ 5 Y7/1 灰白　シルト
㉗ 10YR8/4 浅黄橙色粗砂まじり細砂
㉘ 10YR6/1 褐灰色粗砂まじりシルト（2.5Y8/6 シルトのブロックを含む。）
㉙ 10YR8/4 浅黄橙色粗砂まじり細砂
㉚ 10YR5/2 灰黄褐色細砂まじりシルト
㉛ 10YR5/2 灰黄褐色シルト
㉜ 10YR7/3 にぶい黄色粗砂まじり細砂
㉝ 10YR3/2 黒褐色炭化物層
㉞ 10YR3/2 黒褐色炭化物層（2.5Y8/6 シルトのブロックを含む。）
㉟ 10YR6/3 にぶい黄橙色粗砂まじりシルト（10YR7/4 シルトのブロックを含む。）
㊱ 10YR7/1 灰白色粗砂まじりシルト（2.5Y8/6 シルトのブロックを含む。）
㊲ 10YR6/2 灰黄褐色細砂まじりシルト
㊳ 10YR5/2 灰黄褐色細砂まじりシルト（10YR8/4 シルトのブロックを含む。）
㊴ 10YR5/2 灰黄褐色細砂まじりシルト（10YR8/4 シルトのブロックを含む。）
㊵ 10YR5/2 灰黄褐色細砂まじりシルト（10YR8/4 シルトのブロックを含む。）
㊶ 10YR7/1 灰白色細砂
㊷ 10YR5/2 灰黄褐色細砂まじりシルト（10YR8/4 シルトのブロックを含む。）
㊸ 10YR6/2 灰黄色細砂まじりシルト（2.5Y8/6 シルトのブロックを含む。）
㊹ 10YR6/1 褐灰色細砂まじりシルト
㊺ 10YR6/1 褐灰色細砂まじりシルト（2.5Y8/6 シルトのブロックを含む。）
㊻ 10YR7/3 にぶい黄橙色細砂まじりシルト（2.5Y8/6 シルトのブロックを含む。）
㊼ 10YR5/2 灰黄褐色細砂まじりシルト
㊽ 10YR5/2 灰黄褐色細砂まじりシルト（10YR8/4 シルトのブロックを含む。）
㊾ 10YR5/3 にぶい黄橙色細砂まじりシルト
㊿ 10YR6/3 にぶい黄色シルトまじり細砂
(51) 10YR6/3 にぶい黄色シルトまじり細砂（2.5Y8/6 シルトのブロックを含む。）
(52) 礫
(53) 10YR6/3 にぶい黄橙色粗砂まじりシルト
(54) 10YR7/2 にぶい黄橙色粗砂まじり細砂
(55) 10YR6/1 褐灰色礫まじりシルト～粘土
(56) 10YR6/1 褐灰色礫まじりシルト～粘土（10 ｃｍ大の礫を多く含む）
(57) 撹乱
(58) 撹乱
(59) 10YR7/4 にぶい黄橙色粗砂まじり細砂
(60) 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（10YR7/6 シルトのブロックを含む。）
(61) 10YR7/6 黄橙色シルト
(62) 10YR5/3 にぶい黄色シルトまじり細砂
(63) 5Y5/1 灰色シルト
(64) 10YR6/2 灰黄褐色シルトまじり細砂（10YR7/4 シルトのブロックを含む。）
(65) 10YR7/4 にぶい黄橙色礫（7.5Y6/1 シルト～粘土のラミラ状堆積がみとめられる。
(66) 10YR8/6 黄橙色シルトまじり粘土

第13図　KST07－1　調査区土層断面図（1/60）

〔ＳＷ２〕

調査区の北部にあり、SW１に並行し、この南方向0.5mの場所で検出された。検出面の標高は193.40mである。東西方向に伸びていた。SW２は、東西方向にさらに調査区外へ伸張すると考えられるが、長さ1.5mにわたって検出している。残存高は、最も遺存状況だった場所で遺構面から0.3mであった。概ね２段目まで遺存しており、最下段の石材は、５個体検出した。石材は、平積によって積まれており、石材の大きさは、直径0.2m前後のものが多く使われていた。SW１と対をなすものと推測でき、石組の側溝と考えられる。なおSW２と後述するＳＷ３の隙間からは、瓦が出土している。

〔ＳＷ３〕

調査区の北部にあり、SW２に接して検出された。検出面の標高は193.40mである。東西方向に伸びていた。SW３は、東西方向にさらに調査区外へ伸張すると考えられるが、長さ3.9mにわたって検出している。高さは最も遺存状況が良好な場所で遺構面から0.15mであった。概ね２段目まで遺存しており、最下段の石材は、17個体検出した。石材は、平積によって積まれており、石材は長さ0.3m、高さ0.1m程度の扁平なものが多く使われていた。

〔ＳＷ４〕

調査区の南部で検出された石組の溝である。検出面の標高は193.00mである。東西方向に伸びていた。SW３は、西部が調査区外へ伸びており、東部が攪乱坑によって破壊されているが、長さ4.2mにわたって検出している。高さは調査区壁面で観察したところ遺構面より、0.3mであった。

遺物は、土師皿、瓦質土器、近世陶磁器等が出土している。

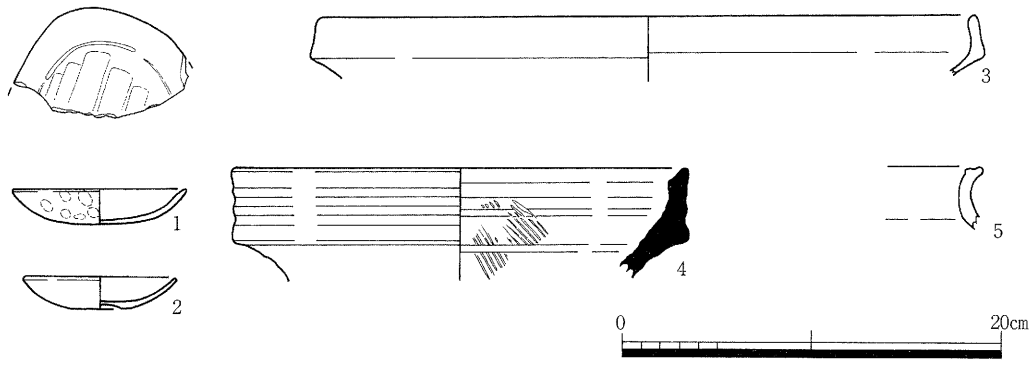
（４）落ち込み

調査区の南端で検出した。検出面の標高は193.00mである。調査区外へと続いていた。落ち込み内は、ブロックを含んだ土によって水平に埋められており、人為的に埋められたことが推定できる。

遺物は瓦等が出土した。

（５）攪乱及び包含層出土の遺物（第14図１～５）

表土及び遺物包含層より、近世の陶磁器、瓦が一定量出土している。また攪乱坑からも瓦が一定量出土している。これらの遺物については、現在整理中であることから、別途報告を行なう予定である。



第14図　KST07－1　出土土器実測図（1/4）

4．まとめ

本現状変更に対しては、平成18年度に新築建物建設予定地周辺に第１～５調査区の合計で５箇所の調査区の設定を行い、確認調査を実施した。調査の結果、第１・２・３調査区からは0.5～0.8mの厚さの造成土が検出された。造成が行なわれた時期は第１調査区で出土した土管から近・現代と考えられる。槇本院庫裏付近に設置した第３調査区に限って、槇本院庫裏建築にともなうとみられる近世の造成土が認められた。

今回の調査では、調査区南部で落ち込みを検出している。当該落ち込みが人為的に埋め立てられている状況が確認できた。平成18年度の発掘調査で検出した造成土に対応するものと考えられる。

平成18年度・平成19年度の発掘調査成果を総合すると、本調査区周辺は本来、南向きの緩やかな斜面地であり、南側に谷状地形が入り込んでいたものと考えられる。これが、水平に造成され、石組遺構等がつくられたものと考えられる。造成の時期については、調査で明確な時期が特定できた遺構はないが、調査区周辺に観心寺の管理を行なうための施設が集中し、江戸時代までは山林であったことが絵図から確認できることから、周辺の建物が整備された近代になって、周囲の造成が行なわれた可能性が高い。

今回検出できた石組遺構も、これらの建物にともなうものと考えられる。

図　　版

図版1　遺構（EBS06—1）

第１調査区調査前状況（西から）

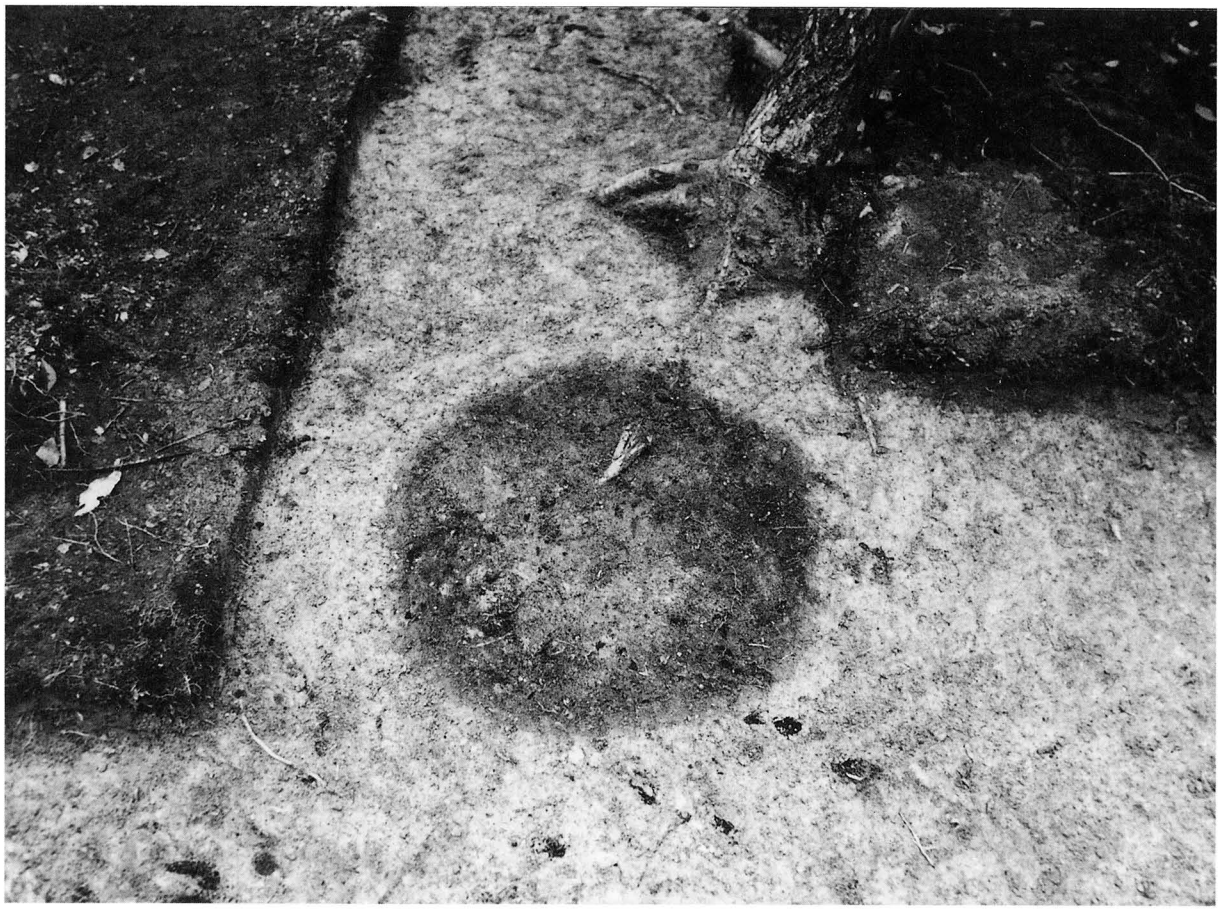
第１調査区調査前状況（東から）

図版2　遺構（EBS06―1）

第１調査区全景（西から）

第１調査区北側拡張部（北から）

図版3　遺構（EBS06—1）



第１調査区検出遺構（SK１）

第１調査区検出遺構（SK２）

図版4　遺構（EBS06—1）

第２調査区調査前状況（東から）

第２調査区完掘状況（東から）

図版5　遺構（EBS06—1）

第２調査区全景

図版6　遺構（KST07—1）

調査区全景（南から）

遺構検出状況（SW４）

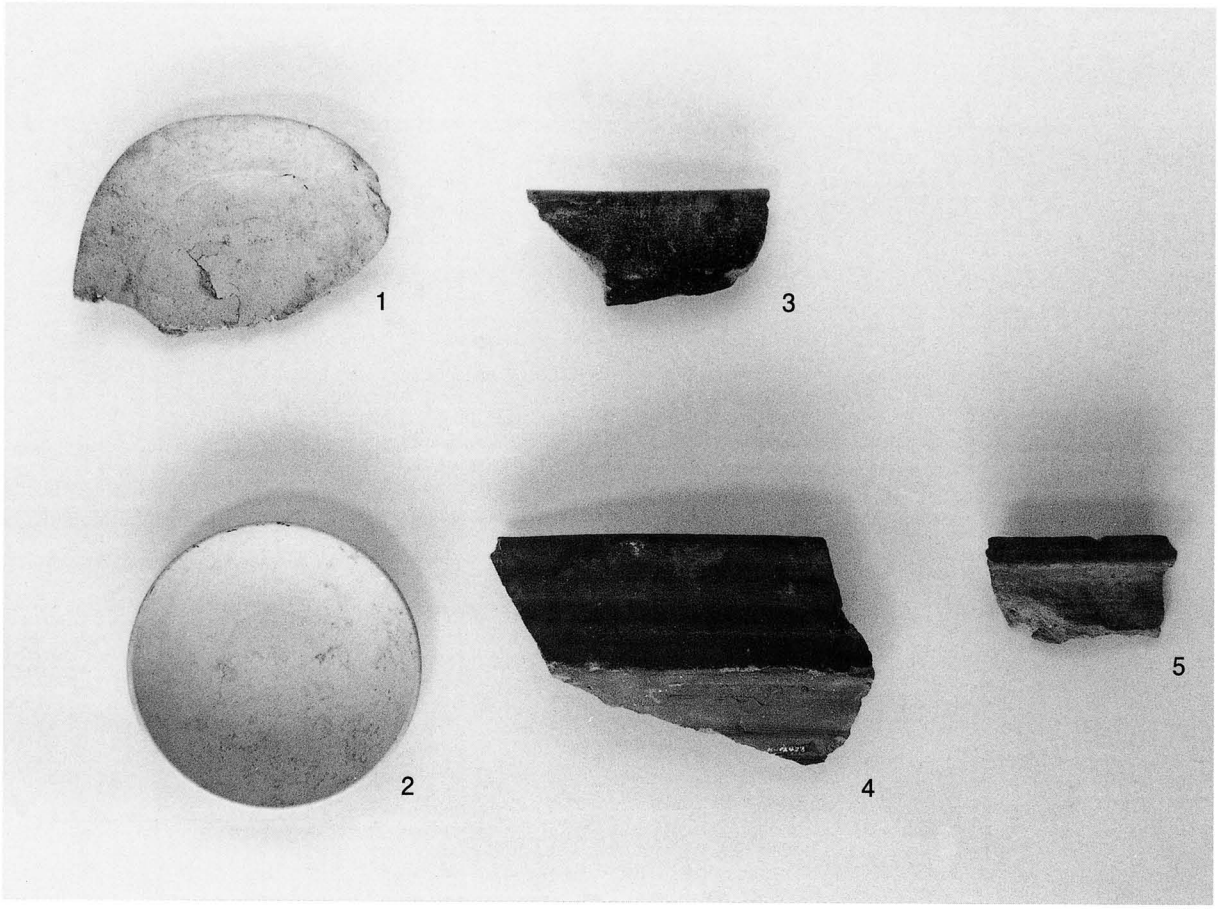
遺構検出状況（SD 3・4）

遺構検出状況（SW 1～3）（南から）

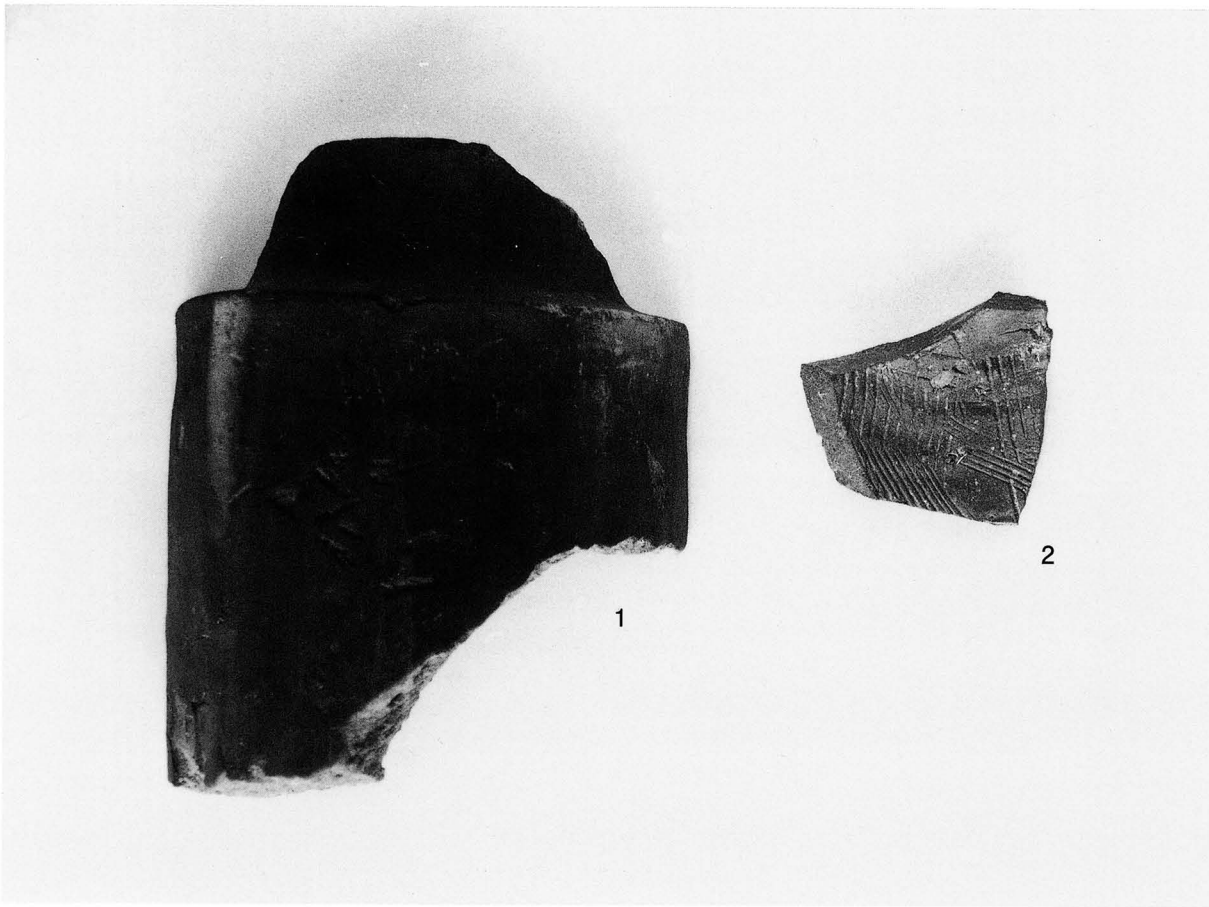
図版8　遺構（KST07—1）

遺構SW１～３（北から）

遺構SW１・３（北から）



ＫＳＴ07－１出土遺物



ＥＢＳ06－１出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	かわちながのしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	河内長野市埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅦ
副書名	烏帽子形城跡　観心寺遺跡
シリーズ名	河内長野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第48輯
編集者名	太田宏明
編集機関	河内長野市教育委員会
所在地	〒586－8501　大阪府河内長野市原町一丁目１番１号 TEL0721－53－1111
発行年月日	2008年３月25日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
烏帽子形城跡	大阪府 河内長野市 喜多町	大阪府 河内長野市	府24 河20	34° 26′ 19″	135° 34′ 04″	H19.2.21 ～ H19.3.19	約10㎡	範囲確認調査
観心寺遺跡	大阪府 河内長野市 寺元	大阪府 河内長野市	府４ 河3	34° 20′ 6″	135° 30′ 36″	H19.11.19 ～ H19.12.21	約100㎡	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
烏帽子形城跡	山城	中世	横堀・土坑	瓦・陶器	
観心寺遺跡	寺院	中世	土坑 溝 石組	陶磁器 瓦質土器 瓦器	

河内長野市文化財調査報告書第48輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅦ

烏帽子形城跡
観心寺遺跡

2008年３月25日発行

発行　大阪府河内長野市原町一丁目１番１号
河内長野市教育委員会
0721－53－1111
印刷　（株）近畿印刷センター